

本棚



がん放射線治療計画ハンドブック

小川和彦, 池田 恢 監訳



どんなジャンルであっても、ハンドブックというものはとにかく“簡便”に扱え、その一方で内容は“的確”であるということが理想だが、実際に探してみると両立しているものはなかなか見付からない。専門書となればなおさらである。そ

ういった中で、放射線治療について“簡便”かつ“的確”に扱ったハンドブックが昨秋刊行された。

本書はアメリカの放射線治療ハンドブック「*Handbook of Treatment Planning in Radiation Oncology*」の和訳書になる。A5 変型判の日常臨床で手元に置くのに便利なサイズにまとめられており、また携帯性にも優れている。

本書の構成は全 13 章から成り、そのうち始めの 2 章は「物理の基本原則」「シミュレーションおよび治療に関する技術」の総論的な内容で、以下の章は「中枢神経系」「頭頸部癌」「乳癌」「胸部」「消化器癌（食道癌を除く）」「泌尿器」「婦人科」「リンパ腫と骨髄腫」「軟部組織肉腫」「小児」「緩和」というように、それぞれの領域ごとの放射線治療を扱った各論となっている。各論では更に“位置決め、固定、シミュレーション”“標的体積と関心領域”“治療計画”などといった基本原則が章の始めに挙げられ、その後に領域に含まれる各疾患（例えば、胸部領域なら肺癌や食道癌など）に対する照射方法が記

述されている。記述はいずれも簡潔ながら段階をきっちりと追ったもので、位置決め 1 つをとっても“どのような体位で”“どのような固定具が必要で”“どのように撮像する”など簡潔に示されており、現場での使用に十分な配慮がなされている。治療計画に関しても標的体積や関心領域が具体的で、照射野の設定などに極めて有効に使用できるだろう。カラー写真も多く使われ、またそれらが極めて効果的に利用されている。

このように、一読すると原書の素晴らしさはもとより、和訳によっても良さが損なわれていないことがよく分かる。翻訳に当たった先生方のご尽力には頭が下がる思いである。

あえて本書を使用するに当たり留意すべき点を挙げるならば、監訳者も序文で述べているが、訳書であるが故に日米での放射線治療の違いがそのまま現れていることだろうか（一部訳者によるフォローは入っているが）。例えば“乳癌の放射線治療”では、我が国ではあまり用いられないことのない“腹臥位での温存術後照射”について位置決めや固定などの注意点が細かく説明されている（日米での体格の差によるものだろう）。また小線源を用いた加速部分乳房照射についてもバルーンアプリケーションの使用や治療計画が具体的に記されており、この治療法が米国でいかに広まっているか感じられる。こういった米国と我が国の臨床現場とのギャップが、本書への若干の違和感となるかもしれない。

ただし、これらのことは日米のいずれかが正しいというものではない。今後我が国でも検討が進むだろうことも多く、国際的な標準化の流れを先取りしていると考ええることもできる。

放射線腫瘍医だけでなく、放射線治療に関わる医師や看護師、技師の方々、放射線治療に興味がある方々に是非お勧めしたい 1 冊である。

（小林裕樹 虎の門病院 放射線科）

（ISBN978-4-89592-726-0, A 5 変型判 248 頁, 本体価格 5,200 円, メディカル・サイエンス・インターナショナル, ☎ 03-5804-6050, 2012 年）